京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」31 研究会

ユーラシア古語文献の文献学的研究

NEWSLETTER

No. 9　2005/05/31

目　　次

活動報告
研究会報告の要旨
次回研究会の開催について
編集後記

活　動　報　告

2004 年 12 月～2005 年 1 月の間に、第 17 回、第 18 回、
第 19 回、第 20 回研究会が開催されました。

◆COE 第 17 回研究会◆

(京都大学言語学懇話会第 66 回例会と共催)

日時 ： 2004 年 12 月 11 日(土)　午後 2 時 30 分～午後 5 時
場所 ： 京大会館 211 号室

「新出のソグド語碑文をめぐるソグド語言語学・文献学の諸問題」
吉田　豊（神戸市外国語大学教授）

◆COE 第 18 回研究会◆

(科学研究費補助金「中央アジアにおけるムスリム・コミュニティーの成立と変容に関する歴史学的研究」研究会と共催)

日時 ： 2004 年 12 月 26 日(日) 午後 2 時～午後 5 時
場所 ： 京都外国語大学国際言語平和研究所 (12 号館 429 会議室)

「『世界征服者の歴史』におけるアラーゥッディーン・ジュワイニーの叙述目的と叙述方法」
ヌールヤグディ・トショフ (ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所研究員)

「インシャー作品に収録された書簡の信憑性について—ティムール関連の書簡を事例として」
サンジャル・グラーモフ (ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所研究員)

◆COE 第 19 回研究会◆

日時 ： 2005 年 1 月 8 日(土) 午後 3 時～午後 5 時
場所 ： 京都大学文学部 新館第 1 講義室

「19 世紀末ロシア農民の手紙文とその背後にある諸事実
—語用論的文献学の確立に備えて—」
オルガ 横山（京都大学大学院文学研究科客員教授）

◆COE 第 20 回研究会◆

日時 ： 2005 年 1 月 29 日(日) 午後 2 時～午後 5 時
場所 ： 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター
（羽田記念館）

「ウイグル木活字の実用性について」
庄垣内 正弘（京都大学大学院文学研究科教授）

“On the Uyghur block prints: Corpus and the process of cataloguing”
Abdurishid Yakup（ゲッティンゲン科学アカデミー研究員）

研 究 会 報 告 の 要 旨

今号では，2004 年 11 月 13 日（土）にユーラシア文化研究センター（羽田記念館）で開催された第 16 回研究会と，2004 年 12 月 26 日（日）開催の第 18 回研究会の報告要旨を掲載します。

第 16 回研究会報告

「15 世紀中央アジアの聖者伝
『マカーマーテ・ホージャ・アフラール』について」

川本　正知（奈良産業大学教授）

報告者は，以下のペルシア語のテキストを東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から出版することができた。

イスラム文化研究第 78 集（Studia Culturae Islamicae No.78）
The 15th Century Central Asian Hagiography
MAQĀMĀT-I KHWĀJA AḤRĀR
Memoirs Concerning Khwāja Aḥrār (1404-1490)
Complied by A disciple called **Mawlānā Shaykh**
Edited by **Masatomo KAWAMOTO**
15 世紀中央アジアの聖者伝
マカーマーテ・ホージャ・アフラール
マウラーナー・シャイフとして知られる弟子　編著
川本正知　校訂
2004（平成 16 年）12 月 27 日発行

このペルシア語テキストは，16 世紀初頭の中央アジアにおいて，ナクシュバンディー教団のシャイフ, ホージャ･アフラール Khwāja Nāṣir al-Dīn °Ubayd Allāh Aḥrār（1404-1490）の弟子の一人で，マウラーナー・シャイフ Mawlānā Shaykh として知られている人物が，ペルシア語で書いた師ホージャ・アフラールの奇蹟譚・言行録集の校訂本である。原本は失われ，当校訂本は現存する 5 写本に拠っている。この著作は一般に *Manāqib* と呼ばれているが，この名称は研究者間の通称であり，本書では，一写本の表紙に書かれた *Maqāmāt-i Khwāja Aḥrār* を著作名とした。

今回の研究報告では，まず，このテキストの序文の内容，すなわち報告者がなぜこのテキストを出版するようになったのか，またどのようにして現存する 5 写本を集めたのかを報告した。

次に，解題として，当テキストの 1．著作名　2．写本　3．刊本　4．編著者　5．構成　6．成立　について説明を加えた。

第 18 回研究会報告―①

『世界征服者の歴史』における
アラーウッディーン・ジュワイニーの叙述目的と叙述方法

ヌールヤグディ・トショフ
(ウズベキスタン国立科学アカデミー東洋学研究所研究員)

本報告は、『世界征服者の歴史』執筆に際しての著者ジュワイニーの目的を明らかにし、さらに、それがどのような形で本書中に反映されているのかを具体的に提示しようとするものである。

一般に、ジュワイニーはラシードゥッディーンと共にモンゴルの公式史家として位置づけられることが多い。たしかに、本書『世界征服者の歴史』には正史としての側面も見受けられる。けれども、本書は特定のモンゴル君主に献呈された形跡がない。さらに、ジュワイニーは本書中で「友人たちの依頼により本書を執筆した」と言明しているが、これは第三者による特別な命令・依頼なしに著述された作品にこそしばしば見出される定型的表現にほかならない。こうした点を考慮に入れるならば、本書はジュワイニーが自発的に著したものとみなすべきであり、ゆえに、本書の執筆に際しては彼の個人的な動機が存在したものとかんがえてよいだろう。

ジュワイニーにおいてモンゴルの征服は、人間の罪や傲慢に対する神の懲罰、即ち「神意」の顕われと評価される。また、彼によれば、モンゴルの征服はイスラームにとっての利益とさえ看做しうるものであった。第一に、モンゴルの支配は東方諸国へのイスラームの拡大を促したし、第二に、モンゴルはムスリムを迫害したクチュルクや、異端のイスマーイール派を滅ぼした。さらに、ムスリムはモンゴルの征服という事件から教訓を得ることができたのだし、モンゴルとの戦闘において落命したムスリムは殉教者の地位さえ獲得できたというのである。

ただし、ボイルやモーガンが指摘するように、ジュワイニーはたんにモンゴルの征服を正当化することだけに腐心していたわけではなく、他方では、自身や読者の「慰め」をも見出そうとしていた。たとえば、彼はモンゴルがホラズム・シャー朝を滅ぼした事件については、率直な哀悼の意を表してさえいるのだ。しかしながら、自身モンゴルに出仕していたジュワイニーは、立場上、つねに自己の心情を率直に吐露できたわけではなく、場合によってはそのために様々な技巧を弄する必要があった。以下に、ジュワイニーが己の心情を書き留めるために利用したテクニックについて説明してゆく。

上述した技巧のうち、彼がとくに好んで用いたのが神話・伝説の叙述に使われるような筋立てや比喩的表現であった。たとえば、ホラズム・シャーのジャラールッディーン・マンクブルニーであるとか、ホジェンドの支配者であるティムール・マリクといった人物がモンゴルと戦った様を描写するとき、ジュワイニーは度々フィルダウスィーの『シャー・ナーマ』を引用し、前二者を善の表象たるイラン人、後者を悪の表象たるトゥラン人に擬している。さらに、本書中では、善の世界の領域たる「イラン」の概念は、イスラーム世界全体にまで拡大されている。

『世界征服者の歴史』において主人公の地位を与えられているのは、上述のジャラールッディーン・マンクブルニーである。本書中、ジュワイニーは時に歴史的事実を犠牲にしてまでも、この人物を叙事詩中の登場人物のごとくに描写している。ゆえに、本書に収録されるジャラールッディーン関連の記事には、その信憑性について慎重な態度をとるべきものも見受けられることとなる。一例として、ジャラールッディーンが 1228 年に挙行したグルジア遠征の記述を取り上げよう。ジュワイニーは、ジャラールッディーンがグルジアの勇士達との一騎打ちに乗り出してこれを撃破した経緯を、『シャー・ナーマ』を引用しながらドラマチックに描き出している。ところが、以下のような理由からこの記事の信憑性は相当に疑わしい。まず、ジャラールッディーン側の史料であるナサヴィーの『スルターン・ジャラールッディーン・マンクブルニー伝』に対応する記事が見当たらない。第二に、当時の一騎打ちのルールからいえば、帝王たるジャラールッディーンの相手はやはり帝王でなければならないが、ここでの一騎打ちの相手はそうではないのである。

これと共に注目に値するのは、モンゴルに対し果敢に抵抗したホジェンドの支配者であるティムール・マリクの生涯を記述するために、ジュワイニーがわざわざ一章を割いているという事実である。一般に、ムスリム史料においてこうした「二流」の人物の生涯が詳細に叙述されるのはきわめて異例のことであるが、ここにはモンゴルに抵抗した人物を英雄として祀り上げようとするジュワイニーの意図が見て取れる。

また、ジュワイニーが作中の登場人物に自分自身の意見を語らせているケースも見出される。たとえば、本書中、前述のジャラールッディーンが、自身をモンゴルとムスリムの間を隔てる「アレクサンドロスの壁」と称する場面があるが、これなどはジュワイニー自身の見解にほかならないだろう。

自身の心情をひそかに吐露するためジュワイニーが利用したテクニックとしては、上記のほか、語呂合わせや比喩表現といった技法も挙げることができる。この技法でもってジュワイニーは、「不信者の」だの「私生児の」といった、無礼極まりない修飾語をモンゴルについて使用しているのである。

これまでの議論を踏まえつつ、ここで結論を述べたい。(I) ラシードゥッディーンを始めとする他のイル・ハーン朝期の歴史家と異なり、ジュワイニーは自身の著作を自発的に書いた。ただしそれは、あくまでモンゴル宮廷の官人としての立場を踏まえたうえで、一定の個人的目的を追求する、という形で行われた。(II) 本書には、モンゴル側の人間としてその支配を正当化しようとする立場と、一個のムスリムとしてモンゴルの征服を否定的に捉える立場という、二つの立場を往き来するジュワイニー個人の心理的葛藤の跡が見られる。(III) 本書を叙述するにあたり、ジュワイニーは己の心情を、上に述べたような様々な叙述テクニックを利用して巧妙に隠蔽しながら書き留めた。(IV) ジュワイニーは本書を一種の教訓の書ともみなしていた。(V) 本書に収録される記事の信憑性を検討する際には、上記のようなジュワイニーの叙述の在り方を常に考慮せねばならない。

第 18 回研究会報告―②

インシャー作品に収録された書簡の信憑性について
―ティムール関連の書簡を事例として―

サンジャル・グラーモフ
(ウズベキスタン国立科学アカデミー東洋学研究所研究員)

ティムールが出現した 14 世紀後半は、中央アジアとその周辺諸地域が地政学上の大変動に見舞われた時代であるが、一方でこの時期は、上述の地域に存在した諸国家間で活発な外交が展開されていた時代でもある。本報告は、当時の外交史を研究するうえで貴重な史料となるティムール関連の外交書簡、とりわけ、後述する「インシャー作品群」に収録されるこれらの書簡の「謄本」について概観し、さらに、インシャー作品群に収録された書簡「謄本」の信憑性を決定する方法についても言及しようとするものである。

現在利用可能なティムール関連の書簡にはその原本が伝存しているものもあり、例えば、ティムールがフランス国王シャルル 6 世との間に取り交わした書簡、さらにはティムールからイギリス国王ヘンリー4 世やスペイン国王エンリケ 3 世に宛てられた書簡などがこの範疇に属している。けれども、ティムール関連の書簡には、原本ではなくその「謄本」のみが伝存するものも多く、一般にこれら「謄本」は、「インシャー」ないし「ムンシャーアート」などと総称される特定の史料群に収録されている (ただし、これらインシャー作品に収録される「謄本」といわれるものが、現実に作成された書簡原本にもとづいた、本当の意味での謄本なのか、それとも現実に存在しない書簡の「謄本」を捏造したものなのかについては、今日に至るまで結論が出ていない。ここで謄本という言葉に鉤括弧を付したのはこうした事情によるものである)。

「インシャー作品」とは、公私の文書や書簡の集成と定義することができ、そのジャンルとしての成立はイスラームの誕生後間もない時期にまでさかのぼることができる。ここで先行研究にもとづきながらその成立史を概観すると以下のようになる。イスラームの誕生後、伝統的なアラブ書記術がサーサーン朝書記術と接触することにより、複雑な修辞的技巧を特徴とするイスラーム書記術が完成する。ついで、これを次世代へと継承してゆくために、書記術に関連する様々な文献ジャンルが成立したが、その内の一つが美文・名文の選集であるインシャー作品というジャンルであった、というのである。

インシャー作品は次の 4 種に分類可能である。即ち、(I) 書簡の形式を提示するだけの目的で作成されたもの、(II) 特定の王朝の君主・貴顕の書簡を一冊の書物に纏める意図をもって作成されたもの、(III) 特定の一門、ないし、家の記録としての性格をもつもの、(IV) 正しい書名が確認できず、さらには冒頭や末尾を欠くようなもの、といった区分である。インシャー作品を史料として利用する際にしばしば問題となるのは、これらの中

に序文を欠くものが少なくないこと、および、これらの作品に収録された書簡「謄本」が、多くの場合日付を欠いていることである。たとえば、インシャー作品の序文は、作品中に収録された書簡原本がいずれの国家の文書庫に保管されていたものかを推測するための手掛かりとなるし、また、書簡の日付は、複数回にわたって遣り取りされた往復書簡の作成順序を確定する際の、決め手となるデータである。

ここまでインシャー作品についての概要を述べた。ここで、ティムール関連の書簡「謄本」を収録するインシャー作品の具体名を挙げておこう。①ファリードゥーン・ベイ『ムンシャーアートゥッサラーティーン』、②ハイダル・エヴオグル『マジュマゥ・ル・インシャー』、③④パリ図書館所蔵 1815、1825 写本、⑤スレイマニェ図書館ムスタファ・エフェンディ・フォンド所蔵 895 写本、⑥ベルリン図書館所蔵 1008 写本、⑦⑧⑨ウズベキスタン共和国東洋学研究所所蔵 2278、296、3742 写本。このうち、①と②は上述したようなインシャー作品の区分では (II) の範疇に属するが、これ以外の③～⑨はすべて (IV) の範疇に含まれる。また、東洋学研究所所蔵写本のカタログに記載される⑦の書名、および、著者名は誤りであり、両者ともに不明とするのが正しい。さらに、同カタログでは⑦と⑧が別個の作品として扱われているが、実は両者は同一作品の別写本である (*Sobranie vostochnykh rukopisei akademii nauk Uzbekskoi SSR*, vol.1, pp.148-9, 152-3)。

最後に、インシャー作品に収録される書簡「謄本」の信憑性を決定する方法について簡単に述べる。それは、(a) 複数のインシャー作品に同一書簡が収録されているならば、その各々を比較検討する、(b) 或る書簡を、その書簡が作成された王朝に敵対する、別の王朝で作成された書簡と比較検討する、(c) 或る書簡のオリジナル・テキストと、その書簡の翻訳テキストとを比較検討する、といったものである。とはいえ、インシャー作品に収録される書簡「謄本」の信憑性について、ここで一般的な結論を下すのは時期尚早であろう。本報告では、個々の書簡「謄本」それぞれについて、その信憑性を一々決定してゆくという態度こそが重要であると指摘するにとどめたい。

（報告要旨：京都外国語大学国際平和言語研究所嘱託研究員　磯貝　健一）

次回研究会の開催について

第 21 回研究会を、第 54 羽田記念館講演会、「古代世界における学派・宗派の成立と＜異＞意識の形成」研究会との共同開催で国際シンポジウムとして行います。皆様のご参加をお待ちしております。

☙ COE 第 21 回研究会 ❧

日時: 2005 年 6 月 4 日 (土) 14:00 ～
場所: 京都大学大学院文学研究科附属 ユーラシア文化研究センター (羽田記念館)

「カローシュティー木簡に見る法と習慣」
赤松明彦 (京都大学大学院文学研究科教授)
司会 : 白石竜彦 (COE 研究員)

「The Pravargya rite of the Veda and the Gandhara Grave culture (1600-900 BCE)
(ヴェーダのプラヴァルギヤ祭式とガンダーラ墓葬文化)」
Asko Parpola (Helsinki University 教授)
司会 : 藤井正人 (京都大学人文科学研究所教授)

In this lecture I propose connecting the gharma vessel of the pravargya rite with the "face urn" of the Gandhara Grave culture, and discuss the coming of the two waves of Rgvedic Aryans to Gandhara (the Swat Valley and the surrounding areas in NW Pakistan) from Central Asia. This would tie up directly with the paper I will be reading on the 28th of May at the Kansai session of the ICES, entitled "The Nasatyas and Proto-Aryan religion", which will roam more widely over Eurasia, from the Volga-Ural steppes to the Bactria and Margiana Archaeological Complex in Central Asia, Mitanni Syria, Old Iranian, and the Veda.

編集後記

COE31 研究会ニューズレター第 9 号をお届けいたします。
今後も活発に研究会等を企画して参りますので, 皆様のご支援, ご協力をお願いいたします。
2005 年 4 月 1 日より稲垣和也が 2005 年度 COE 補佐員となりました。どうぞよろしくお願いいたします。

連 絡 先

「ユーラシア古語文献の文献学的研究」研究会
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科言語学研究室（稲垣）
Tel & Fax: 075-753-2862 E-mail: eurasia-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp
Web page: http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia/